

2019. 6. 8

畑 啓之

姫路藩家老・河合寸翁は町人に至るまで藩内の教育事業を推し進めた

仁寿山校

姫路市史（第4巻）より

姫路藩領には幕末期3校の郷校が設けられている。高砂北本町（現高砂市）に設けられた申義堂、姫路元塩町の熊川舎（ゆうせんしゃ）さらに印南郡国包村（くにかねむら、現加古川市）に設けられた国包郷校である。



姫路 熊川舎（ゆうせんしゃ）

いまはその存在は確認できないが、元塩町の通りにその名を残している。



Web「柳田國男ってどんな人？」より

柳田國男（やなぎたくにお）1875年（明治8年）7月31日、兵庫県神東郡田原村辻川（現；神崎郡福崎町辻川）に松岡操、たけの六男（男ばかりの八人兄弟）として出生。父操は旧幕時代、姫路藩の儒学者角田心蔵の娘婿田島家の弟として一時籍に入り、田島賢治という名で仁寿山齋（じんじゅさんこう）なり、姫路の熊川舎（ゆうせんしゃ）という町学校の舎主として1863年（文久3年）に赴任した。明治初年まで相応な暮らしをしたが、維新の大変革の時には、実に予期せざる家の変動もあり相当な困窮を極めた生活であったようである。（後略）

高砂 申義堂

申義堂（高砂市のホームページより）

今から約200年前の江戸時代、高砂北本町に、庶民の教育の場として創設された学問所です。移築されていた加古川市から、高砂町横町に、江戸時代の姿に復元しました。

構造は、木造平屋建、3間×3.5間、寄棟造、本瓦葺きです。間取りは、20畳の座敷1室、奥の間3間、正面縁側の、簡素な構成です。正面玄関屋根には、飾瓦露盤が葺かれています。

申義堂では、こどもたちが、中国の古典などを教材に、まちの大人たちに教わっていました。

毎日、早朝から正午まで、元旦五節句

と毎月5・15・25日の休み以外は、授業が行われていました。

申義堂のゆかりの人物たち

申義堂教授として、高砂出身の菅野松塙、三浦松石、美濃部秀芳らが、こどもたちに教えていました。美濃部秀芳は町医者で、憲法学者の美濃部達吉の実父です。



加古川 国包郷校

姫路市史にその存在が記されています。

## 国包郷校

姫路市史 第4巻(2009年)  
p.706-707より

天保4年は1833年

姫路市史 第四巻 本編近世2  
姫路市/2009.3

### ■ 第二節 教育と文化の動き 六七六

#### ■ 1 学びの場 六七六

##### ■ I 好古堂

- 姫路好古堂の設立
- 明和・安永期
- 藩士教育の強化策
- 国学寮の併設
- 斎藤守澄
- 儉約令
- 揺れる好古堂
- 森田節齋の来講
- 好古堂の終焉

##### ■ II 林田藩敬業館

- 林田藩敬業館

##### ■ III 仁寿山巒

- 仁寿山巒設立の経緯
- 仁寿山学規
- 来巒した学者たち
- 医学寮の付設
- 終焉

##### ■ IV 郷校

- 申義堂
- 熊川舎
- 国包郷校
- 心学講舎
- 寺子屋

幾し)。  
はその後小野藩領市場村の豪商近藤氏を訪ね、さらに但馬豊岡を経て二カ月余の旅を終えている(『於多満  
講書している。当時七五歳の敬所は淡路の徳島藩家老稲田氏の招きで京都から須本に到り、一五日間稲田氏  
宅で講書し、その後高砂に渡り二日間宿泊してから招きにより国包村まで足を延ばしたものであった。敬所  
国包郷校へは仁寿山巒に出講していた京都の儒者猪飼敬所が天保六年四月二十二日招かれ、郷校で三日間  
を与えた(「姫陽秘鑑」一)。

**国包郷校** 印南郡国包村(現加古川市)に天保四年以前、三谷伊左衛門が中心となり設けた郷校がある。

その設立趣意などについては知られないが、天保四年三谷伊左衛門の奇特の行為を賞して以後毎年米一〇俵  
を下付し、さらに折々仁寿山巒から見廻りを派遣して督励するとし、また当時出精のものに褒美として五俵

## 2 仁寿山校設立

御山拜領

文政二年（一八一九）十二月二十二日、藩主忠実は木綿江戸積やさまざまな殖産事業が実をむすび「家政相整い」「家中安堵」になったことを喜び、河合半之助に老後を養うための山荘・カ所を下賜した。半之助五十三歳のときである。そのとき半之助は隠居所ではなく学問所を創りたいと願いだした。

半之助は翌年九月十一日帰郷し、十二月にはほ場所を決め北原村（地所は兼田）の白鬚山山中に河合家の墓域と別荘、その隣の奥山村に学問所を創ることを決めた。

この学問所を仁寿山校と名付けたのは前藩主の忠道であった。仁寿とは、『論語』の雍也篇「子曰、知者楽水、仁者乐山、知者動、仁者静、知者楽、仁者寿」から採ったことばである。「知者は水を樂しみ仁者は山を樂しむ、知者は動き仁者は静かである、知者は樂しみ仁者は長生きをする」と読む。

仁とは一般に寛い愛をいうが、孔子は「目の前の損得にとらわれずおおらかに人生を見、困難なこともあとまわしにせず先に立ち向かうこと」と定義している。

右は、書籍「姫路藩の名家老 河合寸翁 藩政改革と人材育成にかけた生涯」（熊田かよこ、2015年）よりの抜粋である。

